

『搜神記』所收の再生記事に關する考察

—五行志的記事の展開と變容—

はじめに

『搜神記』は從來、六朝志怪の書の代表として捉えられてきた。しかしながら『搜神記』を構成する個々の記事については、史書を始めとする各種の文獻と類同の關係にあることも、先行研究によって明らかにされてきた。

本稿は、『搜神記』所收の「再生」記事の考察を通じて、史書「五行志」との共通事項を多く有する『搜神記』の特徴について再検討し、その編纂意圖を正しく把握し、本來『隋書』經籍志等の「史部雜傳類」に著録されていた『搜神記』が、何故後世において志怪小説を代表する著作とされていくのか、その所以を明らかにするものである。

『隋書』經籍志「史部雜傳類」には『搜神記』の成立に深く關與したと思われる書が幾つか見えるが、中でも篇敘に「鬼物奇怪之事」を記すものとして取り上げられた魏・曹丕撰と傳えられる『列異傳』は、『搜神記』に先行する志怪書の嚆矢であり、中國志怪小説の誕生・形成を語る際には見逃せない存在である。しかし『搜神記』は現在『列異傳』の記事として傳えられている計四九條のうち二五條もを取り込んでおり、しかも、『法苑珠林』を始めとする後世の類書や史書の注

河野貴美子

にはそれらの記事を『列異傳』からではなく『搜神記』を出典として引用するものが多いことや、類書などによって現在に傳えられる『列異傳』の記事に断片的なものが多いのに對し、『搜神記』の方が話としてまとまった形で傳えられているものがあることは、『搜神記』が後世に與えた影響の大きさ、そして怪異記事を集める志怪というジャンルの確立に『搜神記』が果たした役割の重要性を窺わせる。しかしここで本稿が注目したいのは、後世において志怪小説と稱される著作が本來「歴史に關わる記録」というスタンスから出發していることで、とりわけ正史等の史書や史書の注釋、そして五行志との重なりを豊富に持つ『搜神記』の姿にこそ、歴史の記録から志怪、説話へとという展開が顯著に見えるのではないかとということである。

『搜神記』は、『晉紀』を撰した東晉一流の史家であり學識者であった干寶が「易」や「春秋」の學術思想に則って編纂した、書名が示す通り「神」を「搜」し究めるための「記」であり、もとより「小説」の類ではなかった。³従って、災異を解し歴史を説き、それを現實に照らし世のあり方を問う五行志的世界は、これこそ『搜神記』にふさわしい内容であったと考えられる。ところがそれらの記事は、著作されて幾ばくもなく史書の諸注釋や類書に引用される中で、説話的側面が

表①『搜神記』所収の再生記事

	搜神記	引用	類話
1	1-26 吳猛	『御覽』702、『書鈔』103	『幽明錄』、『晉書』95 吳猛傳、『十二眞君傳』
2	*6-143 兒啼腹中	『珠林』97	『漢志』
3	*6-146 人死復生	『珠林』97、『御覽』887	『漢志』、『漢紀』
4	*6-166 桓氏復生	『珠林』97	『續志』
5	*6-177 陳焦復生	なし	『吳志』3 孫休傳、『宋志』、『晉志』
6	15-359 王道平	なし	句道興本『搜神記』
7	*15-360 河間郡男女	『珠林』75、『御覽』887	『宋志』、『晉志』
8	15-361 賈文合	『御覽』887、『廣記』386、『類說』7	なし
9	*15-362 李娥	『續志』注、『珠林』97	『續志』、『廣記』375 引『窮神祕苑』
10	15-363 史姁	『珠林』97、『廣記』375	『列異傳』
11	15-364 賀瑀	『御覽』344	『錄異傳』
12	15-365 戴洋復生	なし	王隱『晉書』、『晉書』95 戴洋傳
13	15-366 柳榮張悌	『吳志』3 注、『御覽』877	『眞誥』13
14	*15-368 顏畿	『御覽』887、『廣記』383	『宋志』、『晉志』、『晉書』88 顏含傳、『獨異志』
15	15-370 漢宮人冢	なし	『博物志』2、『山海經』海內西經注、『魏志』3 注引顧愷之『啓蒙注』
16	*15-371 棺中生婦	なし	『魏志』3 明帝紀裴注、『宋志』、『晉志』、『御覽』558 引『傅子』
17	*15-372 杜錫婢	『類聚』35、『珠林』97、『初學』19、『御覽』500、『廣記』375	『宋志』、『晉志』

引用の項は『搜神記』を引用する書目、類話の項は『搜神記』との類話を載せる書目。*は五行志との共通記事。『漢志』『續志』『宋志』『晉志』は各々『漢書』『續漢書』『宋書』『晉書』五行志、『御覽』は『太平御覽』、『書鈔』は『北堂書鈔』、『珠林』は『法苑珠林』、『廣記』は『太平廣記』、『初學』は『初學記』、『類聚』は『藝文類聚』。以下同じ。

強調されていく。これは『搜神記』自身が五行志との深い関わりを持ちながら、同時に五行志とは異なる独自の性格や理論を内在させていたことに起因すると考えられる。ここで『搜神記』の再生記事を取り上げ、『搜神記』が歴史の記録から説話的な「雑傳」へと展開していく、中國文學史上重大な轉換點に位置する著作である、その具體的様相を指摘していくこととする。そしてさらに、『搜神記』が後世志怪小説の典型として位置付けられていくさまを、特に『法苑珠林』に注目し辿っていきたい。

『搜神記』はすでに小南一郎氏、李劍國氏らによる研究が進み、干寶という人物や『搜神記』という著作の性格、また二十卷本『搜神記』の編纂等について多角的に見直しを圖る論考が提出されている。また『搜神記』と史書五行志との共通記事については、つとに『四庫提要』が原「搜神記」からの存在を疑問視し、のち余嘉錫が『辯證』で反論を加えて以来、『搜神記』研究の一焦點として議論されてきた。當初史書の一類とされた『搜神記』に五行志の記事が多出することについて、干寶の學術や當時の史書のあり方を絡め、著作としての本質に關わる問題を提起した小南一郎氏の論考はとりわけ多くの示唆に富む。特に、干寶が東晉の現實社會の諸現象に關心を懷き、それを理論化するため「易」や五行災異の思想を用いたのであり、これは當時の史書の方法と共通するものであったという小南

氏の指摘は肯綮に當たるものである。^⑦

さて、『搜神記』の再生記事は、表①にあげた通り五行志との類話が多く、史書の諸注釋や類書への引用も豊富で、『搜神記』の實像に迫る恰好の切り口となりうる。「六朝志怪」の再生記事については、「再生の奇蹟そのものを伝えるプリミティブな記録から、再生という事件を合理化、必然化しようとするフィクションナルな工夫がこらされた物語りに變化する過程」を追った竹田晃氏の論があり、この竹田氏の論考を引きつつ『搜神記』の再生記事について五行志との共通記事にも言及した大橋由治氏の考察等もある。『搜神記』の再生記事を通して『搜神記』が物語的に展開していく、その兆しを持つものとして捉えていくことは本稿においても同様であるが、以上の先行研究を踏まえつつ、ここでは五行志との關係、史書や史書の注釋、また『法苑珠林』への引用狀況等を、さらに詳密に追究することによって、『搜神記』が文學史上に發揮した役割に特にスポットをあて、中國志怪小説確立の基點となった『搜神記』の姿とその意義を明らかにしたい。

一、『漢書』五行志と『搜神記』の再生記事

まず、『漢書』五行志と『搜神記』との共通記事から見よう。『漢書』五行志における再生記事は「下人伐上之病」に二條あり、これらはいずれも二十卷本『搜神記』に共通記事が採られている。『漢書』五行志全體と『搜神記』には計三九條の共通記事があるが、そこには一定の傾向が見られる。『搜神記』は五行志の自然現象に關わる記事等は多く採らないものの、人事に關する災異記事は多數共有するのである。表②にあげた通り『漢書』五行志「下人伐上之病」は十一條から成るが、うち八條が『搜神記』にも採られており、『漢書』五

表②『漢書』五行志「下人伐上之病」と『搜神記』

	漢書五行志・下人伐上之病	搜神記	引用	類話
1	文公11年	狄族を敗る	なし	
2	秦始皇帝26年	大人現れる	6-117	なし
3	魏襄王13年	女が男に化す	6-115	『珠林』32 『御覽』87引『洪範五行傳』
4	哀帝建平中	男が女に化す	6-145	『珠林』32
5	◆哀帝建平4年4月	再生	*6-143	『珠林』97
6	◆平帝元始元年2月	再生	*6-146	『珠林』97 『御覽』887
7	6月	兩頭の兒	6-147	『珠林』70
8	景帝2年9月	人に角生える	6-121	『珠林』32
9	成帝建始3年10月	妖言、宮殿に侵入者	なし	
10	成帝綏和2年8月	宮殿に侵入者	なし	
11	哀帝建平4年正月	民衆が騒ぐ	6-144	なし

◆は再生に關する記事。以下同じ。

以下、具體的に記事の内容を見よう。『搜神記』卷六一「四三・兒帝腹中」^⑧は、土の中に埋めた子供ので掘り出して育て

行志全體から見ると、この部分における共有記事の割合の高さが指摘されうる。このことはのちに取り上げる『續漢書』以下の五行志との關係においても同様であり、『搜神記』が示す重要な志向、傾向と判断できる。また、『漢書』五行志との共通記事の多くを『法苑珠林』はその五行志からではなく、『搜神記』を典故として引用していることが注目される。

たというもので、厳密な意味では再生記事と言えないかも知れないが、次の卷六一―四六「人死復生」は、病死した人が亡夫に會い、まだ死ぬ時期ではないと言われて蘇生するというもので、後の佛教説話における冥界譚に通じる内容となっている。

漢平帝元始元年二月、朔方廣牧女子趙春病死。棺殮、六日、出在棺外。自言見死夫、乃曰「年二十七、汝不當死。」太守譚以聞。

説曰「至陰爲陽、下人爲上。」其後、王莽篡位。(漢の平帝元始元年二月、朔方郡廣牧縣の女、趙春が病死した。棺に納め六日後、外へ出て来て自らこう語った。亡夫に會い、「二十七歳ではまだ死ぬ時期になっていない」と言われた、と。太守の譚がこれを奏上した。一説には「陰が陽となり、下の者が上位につくのだ」と言う。その後王莽が帝位を篡奪した。)

一方、『漢書』五行志の共通記事には、「説曰」の前の部分に、京房易傳曰「幹父之蠱、有子、考亡咎。子三年不改父道、思慕不皇、亦重見先人之非、不則爲私、厥妖人死復生。」(『京房易傳』に言う。「父の蠱に幹たり、子あれば考に咎なし」。子が父の死後三年父のやり方を改めないのは、ひたすらに思慕し、また故人の非をさらすのを憚るからである。でなければ身勝手であり、死者が再生するという妖が生じる」と。)

と『京房易傳』の引用があるが、『搜神記』はこれを省略する。ここに注目したいのは、『搜神記』末尾に付された、災異を王莽の篡位につなげる解釋がもとの『漢書』五行志の方には見えないことである。『漢書』五行志との共通記事において、『搜神記』が王莽の事件に結びつける言辭を獨自に加える例は他にも見えるが、逆に『漢書』には王莽の事件への言及があるのに對し、『搜神記』がそれを簡略・省略す

『搜神記』所收の再生記事に関する考察

る場合もある。例えば『法苑珠林』卷三二引『搜神記』「雌鷄化雄」は、共通記事である『漢書』卷二七・五行志中之上「鷄禍」宣帝黃龍元年條が災異の應現として王莽の亂に至る歴史を詳述するのに對し、五行志以爲王氏之應也。(五行志ではこれを王氏の事件の豫兆と見なしている。)

とのみ述べる。この「五行志以爲」という語は『搜神記』に計五箇所見え、干寶は『漢書』五行志をもって參考引證する際の一方法と考えられる。干寶は『漢書』五行志に注目し、それを多く取り込みながら『搜神記』を編纂した。そしてその際、五行志の記事をそのままストリートに受け継ぐのではなく、自身のフィルターを通して消化改變し再編集を施しているのである。なお先ほど見た『搜神記』「人死復生」では、『漢書』五行志に引かれた『京房易傳』が削られていたが、他の例においては『搜神記』は逆に京房を重視する傾向にある。

二、『續漢書』五行志と『搜神記』の再生記事

次に『續漢書』五行志と共通する『搜神記』の再生記事を見よう。表③は『續漢書』五行志と『搜神記』との共通記事のうち、人事の災異に関する部分の對照表である。『漢書』が「下人伐上之痼」とまとめていた人に關わる災異記事を、『續漢書』は「人癩・人化・死復生」に分けており、これはそれぞれの事象に對する關心の強まりによる細分化とも讀める。ただその記事の数はあまり變わらず、再生の記事も『搜神記』と共有する二條のみである。しかし、『續漢書』五行志と『搜神記』との共通記事は計十九條あるうち、九條が人事の災異に關わるものであり、『漢書』の場合にもまして人に關する災異記事に『搜神記』との共通部分が集中している傾向が見てとれる。

表③『續漢書』五行志「人痾・人化・死復生」と『搜神記』

	續漢書五行志・人痾	人化	死復生	搜神記	引用	類話
1	人痾	安帝永初元年 11月	民衆が騒ぐ	なし		
2		靈帝建寧3年春	夫婦が食い合う	6-155	『珠林』44	
3		熹平2年6月	妖言	6-156 6-153	なし 『珠林』44	『風俗通』
4		光和元年5月	宮殿に侵入者	なし		
5		2年	兩頭の兒	6-159	『珠林』70	
6		4年	宮殿に侵入者	なし		
7		中平元年6月	兩頭の兒	6-162	なし	
8	人化	靈帝時	人、鼃に化す	14-355	『珠林』32	『廣記』471引『鬼神傳』
9	死復生	◆獻帝初平中	再生	*6-166	『珠林』97	
10		◆建安4年2月	再生	*15-362	『續志』注、 『珠林』97	『廣記』375引『窮神祕苑』
11		7年	男が女に化す	6-167	『珠林』32	
12		建安中	兩頭の兒	6-162	なし	

では再生の内容を見る。『搜神記』卷六一一六六「桓氏復生」は、ある人が納棺後再生したという簡略な記事であるが、『續漢志』第十七・五行五「死復生」の劉昭注引「干寶搜神記」では、再生者が語る冥界物語を含む長文の記事である。

干寶搜神記曰、「武陵充縣女子李娥、年六十餘、病死、埋於城外、已十四日。娥比含有蔡仲、聞娥富、謂殯當有金寶、盜發冢剖棺。斧數下、娥於棺中言曰、「蔡仲、汝護我頭。」驚遽、便出走。會爲吏所見、遂收治、依

法當棄市。娥兒聞、來迎出娥將去。武陵太守聞娥死復生、召見問事狀。娥對曰、「聞謬爲司命所召、到得遣出、過西門、適見外兄劉伯文、爲相勞問、涕泣悲哀。娥語曰、「伯文、一日誤見召、今得遣歸、既不知道、又不能獨行、爲我得一件不。又我見召在此、已十餘日、形體又當見埋藏、歸當那得自出。」伯文曰、「當爲問之。」即遣門卒與戶曹相問、「司命一日誤召武陵大女李娥、今得遣還。娥在此積日、尸喪又當殯殮、當作何等得。又女弱獨行、豈當有伴邪。是吾外妹、幸爲便安之。」答曰、「今武陵西男民李黑、亦得遣還、便可爲伴。」輒令黑過、勅娥比舍蔡仲、令發出娥也。

於是娥遂得出、與伯文別。伯文曰、「書一封以與兒佗。」娥遂與黑俱歸、事狀如此。』太守慨然嘆曰、「天下事真不可知也。」乃表以爲「蔡仲雖發冢、爲鬼神所使、雖欲無發、勢不得已。宜加寬宥。」詔書報可。太守欲驗語虛實、即遣馬吏於西界推問李黑得之。黑語字猶在也、而書不可曉。乃請費長房讀之、曰、「告佗。當從府君出案行、當以八月八日中時、武陵城南溝水畔頓、汝是時必往。」到期、悉將大小於城南待之。須臾果至、但聞人馬隱隱之聲、詣溝水、便聞有呼聲曰、「佗來。汝得我所寄李娥書不邪。」曰、「即得之、故來至此。」伯文以次呼家中大小問之、悲傷斷絕。曰、「死生異路、不能數得汝消息。吾亡後、兒孫乃爾許人。」良久謂佗曰、「來春大病、與此一丸藥、以塗門戶、則辟來年妖癘矣。」言訖忽去、竟不得見其形。至前春、武陵果大病、白日見鬼、唯伯文之家、鬼不敢向。費長房視藥曰、「此方相臨也。」（干寶搜神記に言う。武陵郡充縣の李娥という女が死に埋葬されたが、蔡仲という者が墓を盗掘しようとする）と娥は生き返った。武陵太守は娥が再

生したと聞き、召し出して事情を尋ねると娥は、「あの世に召されたのは司命の誤りで、歸される時に外兄の劉伯文に會った。一人旅は心細いので李黒という男を付けてもらい、また墓から出る手立てとして蔡仲に墓を開けさせることになった。伯文からは息子の佗への手紙を預かっている」と答えた。太守は蔡仲に寛大な處置を願う上奏をし許された。また李黒の供述は娥の話と一致した。伯文の手紙の内容を費長房に讀んでもらい、そこに書いてあった約束の場に佗が赴くと、姿は見えないものの伯文は翌年の流行病を防ぐ薬を佗に授ける。果たして佗の家は病鬼を近づけず無事であった。費長房はその薬を「方相の腦だ」と言った。（譯文は梗概のみ）

これはこの『續漢志』第十七・五行五「死復生」が簡単に、建安四年二月、武陵充縣女子李娥、年六十餘、物故。以其家杉木樽斂、瘞於城外數里上。已十四日、有行聞其家中有聲、便語其家。家往視聞聲、便發出、遂活。（建安四年二月、武陵郡充縣の女、李娥が六十餘歳で死んだ。その家の杉で棺を作り納め、城外數里の所に埋葬した。十四日後、墓の中から聲がするのを通りがかりの人が聞き、李娥の家に知らせた。家の者が行くと、聲が聞こえたので、墓を開けると生き返った。）

と、再生のみを伝えるのに對し、『搜神記』においては再生の経緯を具體的に語る冥界物語が展開され説話的興味を豊富に取り入れているのである。『續漢書』は司馬彪の撰であり、『搜神記』成立とまさに時期が重なることから、干寶が『續漢書』から『搜神記』に引用したのではなく、『續漢書』が収集した記事を干寶も史家として共有しており、そこから『搜神記』にふさわしい記事をピックアップしたのでは

ないかと考えられる。そしてだからこそこのように、『續漢書』と『搜神記』には類話でありながらも異同が多いという現象が見えるのであるろう。

例えば『搜神記』卷六一・一五三「赤厄三七」、一五五「夫婦相食」は、ともに『續漢志』第十七・五行五「人痾」との共通記事であるが、『搜神記』の方は『續漢書』五行志にない独自の議論や解釋を加えている。これらはともに『法苑珠林』卷四四に現二十卷本『搜神記』とほぼ同文の形で引用されていることから、その議論や解釋は原「搜神記」から存在した干寶の文章であろうと考えられる。そして特に「夫婦相食」で、夫婦が食い合うのは陰陽が相侵すことであるという、『續漢書』にはない解釋を付した後、

恨而不遭辛有・屠乘之論、以測其情也。（辛有や屠乘のように、この災異を推測できる人がいなかったのは残念である。）

と嘆く部分は注目すべきである。實は干寶は『晉紀』總論でこの辛有を取り上げ、豫言者や識者の意義を説いている。従ってこの「夫婦相食」に見える議論や解釋は、干寶自身の災異や豫言への興味と知識を窺わせる重要な箇所である。

ここで再び「李娥」の記事に目を戻すが、次に取り上げたいのは、この記事が『續漢書』劉昭注に引用されていることである。『續漢書』五行志の劉昭注が現二十卷本『搜神記』とほぼ同文の記事を「干寶搜神記」から引用するものは、他に卷六一・一四九「德陽殿蛇」や一六八「荊州童謠」があるが、劉昭の注釋は原「搜神記」が散佚している現在、原「搜神記」成立と重なり合う時期に作装された文獻における『搜神記』の引用ということで、原「搜神記」の姿を確認復元する上で貴重な資料である。と同時に干寶直後の時代の史書の注釋に『搜

神記』が用いられたことは、史家干寶の『搜神記』が、まさに歴史資料としてひろく公認されていたことを意味する。劉昭は郡國志注にも「干寶搜神記」を六條引き、また百官志等にも干寶の『周禮注』等をたびたび引用する。『搜神記』や干寶の文章が劉昭の注釋に引用されているこの事實は、干寶の著作や學術が當時の學識者の信頼に堪えるものとして高く評價されたことを明らかにしている。

さて、『搜神記』『李娥』のように、獨自の異聞を含み持つ物語りの再生記事は、他にも例えば『搜神記』卷五十一・三六一「賈文合」がある。これも「李娥」同様に冥界での様子が詳しく語られ、また太山の吏が同名の人を誤って冥界に召すこと等、やはり後世の佛教説話に連なるモチーフを有する。そして「賈文合」は『太平御覽』や『太平廣記』に『搜神記』を典故とする引用があるものの、他書に類話が見られないことから、これも『搜神記』が獨自に傳えた再生記事と考えられる。

次に、五行志の記事の説話的展開ということも含め、『宋書』『晉書』五行志に共通する『搜神記』の再生記事を見ていく。

三、『宋書』『晉書』五行志と

『搜神記』の再生記事

『宋書』五行志・『晉書』五行志と『搜神記』の共通記事は計七四條ある。表④にあげた通り、うち十七條が「人痾」に含まれ、ここでもやはり「人痾」において『搜神記』との共通記事の多さが際立っている。そしてこのうち、再生に關する記事は五條である。

まず『搜神記』卷六一・七七「陳焦復生」を見る。

吳孫休永安四年、安吳民陳焦、死七日復生、穿冢出。烏程孫皓承

廢故之家、得位之祥也。(吳の孫休永安四年、安吳の陳焦が死後七日して生き返り墓から出て來た。これは烏程侯孫皓が家系を戻し即位したことの祥である。)

これは「類書」等に『搜神記』を典故とする引用がなく、原『搜神記』から存在したかどうか確認できない記事であるが、注目すべきは『宋書』『晉書』五行志の共通記事における「干寶曰」という語である。すなわち、『搜神記』の記事の「烏程孫皓……」以下の部分を、『宋書』『晉書』は「干寶曰、『此與漢宣帝同事。烏程侯皓……』(干寶曰く「これは漢の宣帝の事と同じである。これは烏程侯孫皓が……」)としており、災異解釋を干寶の文章として引く。『宋書』『晉書』五行志には「干寶曰」という語がたびたび見えるが、この「干寶曰」については、『搜神記』以外の干寶の著作からの引用である可能性も指摘されている。しかし例えば卷七一・一八六「武庫飛魚」は唐代初期成立の『法苑珠林』卷三二に、『宋書』の共通記事が「干寶曰」とする災異解釋部分を含む引用が見え、やはりこの記事は五行志的解釋を含む形で原「搜神記」から存在していたものと思われる。

『宋書』『晉書』五行志が「干寶曰」「干寶以爲」という形を多く引くのは、これが他でもなく「五行志」であるがゆえのことであろう。すなわち『漢書』五行志以來の「董仲舒曰」「劉向曰」という形式に則っての「干寶曰」なのであり、これは干寶が集めた五行志の記事及び五行志的災異解釋が、『宋書』『晉書』という史書にやはり歴史資料として大きく影響し利用されたことを示している。

さてこの「陳焦復生」のように、再生という災異を歴史事件等の豫兆と解釋する記事は五行志の形式に則るものであるが、『宋書』『晉書』五行志との共通記事の中には再生の記事のみを傳えて災異解釋が

表④ 『宋書』『晉書』五行志「人痾」と『搜神記』

	宋書五行志・人痾		晉志	搜神記	引用	類話
1	魏文帝黃初初	女が鼈に化す	あり	14-356	『類聚』96	
2	◆魏明帝太和3年	再生	あり 一部 無	*15-371	なし	『魏志』3明帝紀裴注、 『御覽』558引『傅子』
3	吳孫亮建興2年	侵入者、血臭	なし	なし		
4	◆吳孫休永安4年	再生	あり	*6-177	なし	『吳志』3孫休傳
5	吳孫皓寶鼎元年	女が鼈に化す	あり	14-355 14-357	『珠林』32 『珠林』32	『廣記』471引『鬼神 傳』、同引『廣五行記』、 『御覽』66引『丹陽 記』
6	魏元帝咸熙2年	大人現れる	あり	なし		
7	晉武帝泰始5年	人に角生える	あり	6-121	『珠林』32	
8	◆晉武帝咸寧2年	再生	あり	*15-368	『御覽』887、 『廣記』383	『晉書』88顏含傳、 『獨異志』
9	晉惠帝元康中	女が男に化す	あり	7-196	『珠林』32	
10	晉惠帝永寧初	大司馬門で出産	あり	なし		
11	永寧元年12月	白頭公の侵入	あり	なし		
12	晉惠帝太安元年	宮殿に侵入者	あり	7-203	なし	
13	◆晉惠帝世	再生	あり	*15-360	『珠林』75、 『御覽』887	
14	◆晉惠帝世	再生	あり	*15-372	『類聚』35、 『珠林』97、 『初學』19、 『御覽』500、 『廣記』375	
15	晉惠帝光熙元年	男女兩體の兒	あり	なし		
16	晉惠、懷之世	男女兩體	あり	7-195	『珠林』32	
17	元帝太興初	陰部の異常	あり	7-221	『珠林』32	
18	晉孝懷帝永嘉元年	鳥頭馬蹄の兒	あり	7-207	なし	
19	晉愍帝建興4年	兩頭の兒	あり	7-215	『珠林』70	『瑠玉集』14
20	晉中興初	陰部の異常	あり	7-221	『珠林』32	
21	晉元帝太興3年	異形の兒	あり	7-208	なし	『晉紀』、『獨異志』
22	◆晉明帝太寧2年	再生	あり	なし		
23	晉成帝咸康4年	侵入者	なし	なし		
24	咸康5年4月	妖言	あり	なし		
25	晉康帝建元2年	足に文字	あり	なし		
26	石虎末	聖人像の異常	なし	なし		
27	晉孝武帝寧康初	女が男に化す	あり	なし		
28	晉安帝義熙7年	急成長	あり	なし		
29	義熙中	土中から聲	あり	なし		
30	義熙末	二陽道	あり	なし		
31	晉恭帝元熙元年	男女兩體	あり	なし		
32	宋文帝元嘉17年	風雨に乗り妖言	なし	なし		
33	孝武帝大明中	腹中から兒の聲	なし	なし		
34	大明末	腹中に兒を生む	なし	なし		
35	明帝泰豫元年	巨人現れる	なし	なし		
36	後廢帝元徽中	腹中から兒の聲	なし	なし		
37	元徽中	卵中に人形	なし	なし		

『搜神記』所収の再生記事に関する考察

なく終わるものもある。例えば『法苑珠林』卷七五引『搜神記』「河間郡男女」は、許婚の男の從軍中、無理矢理他の男と結婚させられた女が病死するが、歸還した男が墓を開けるとその女は生き返ったという話で、再生した女を奪い返そうとする夫と訴訟になるが、廷尉が「これは非常のことである」と判じ、墓を開けた男に女を返す。ここに見える廷尉とは共通記事である『宋書』『晉書』五行志においては「祕書郎王導」とされる。王導は『晉書』卷八二「干寶傳」によると干寶を國史に推薦した人物であり、王導の登場するこの話は干寶の身近で語られた話であったと想像できる。それを『搜神記』は『宋書』『晉書』に比べて詳しく述べ、結果として異聞への興味を強く感じさせる歴史記事に仕上げているのである。

また『搜神記』卷十五—三六八「顔畿」は、『宋書』『晉書』五行志が記述を簡略化するのに對し、『搜神記』が説話的膨らみをもつさまをより顯著に見せる。『太平御覽』卷八八七引『搜神記』を見る。

晉咸寧中、琅邪顔畿、得病、就醫、張嗟自治、死於張家。家人迎喪、旆每繞樹木不可解。送喪者、或爲之傷乃言曰、「我壽命未應死、但服藥太多、傷我五臟耳。今當復活、慎無葬我也。」父拊而祝之、曰、「若爾有命、復當更生、豈非骨肉所願。今但欲還家、不葬爾也。」旆乃解。還家、乃開棺、形骸如故、微有人色、而手爪所刮摩棺材、皆傷。於是漸漸氣息、以綿飲瀝口、能咽、遂乃出之。日久飲食稍多、能開目視瞻、屈伸手足、然不與人相當、不能言語、飲食猶常人。如此者十餘年。家疲相供護、不復得操事。其弟弘都絕棄人事、躬侍養、以知名。後氣力稍更衰劣、卒後還死。（晉の咸寧中、琅邪の顔畿が死ぬ。葬送の時、弔旗が木に絡まる怪が起り、棺を引いていた者が「壽命が盡きたのではなく薬を

飲み過ぎただけである。生き返るので埋葬するな」という顔畿の言葉告げた。父がそれに答えると弔旗は解け、家に歸り棺を開けるとやがて息を吹き返した。話すことはできなかったが、十餘年にわたり弟は獻身的に世話に務め、美名が傳わった。後に氣力が衰え再び死んでしまった。（譯文は梗概のみ）

一方、『宋書』『晉書』の共通記事は簡略な記事である。『宋書』卷三四志・五行五「人痾」の本文をあげる。

晉武帝咸寧二年二月、琅邪人顔畿病死、棺斂已久、家人咸夢畿謂己曰、「我當復生、可急開棺。」遂出之。漸能飲食屈伸視瞻、不能言語也。二年復死。其後劉淵、石勒遂亡晉室。（晉の武帝咸寧二年二月、琅邪の顔畿が病死した。棺に納めて随分経った頃、家族の者たちの夢に畿が現れ「生き返るので急いで棺を開けろ」と告げた。そこで棺から出すと生き返り、飲食もできるようになったが、話すことはできなかった。畿は二年経ち再び死んだ。その後、劉淵・石勒が晉を滅ぼした。）

また『晉書』卷二九志・五行下「人痾」の共通記事は末尾を次のように締め括る。

京房易傳曰、「至陰爲陽、下人爲上、厥妖人死復生。」其後劉元海、石勒僭逆、遂亡晉室、下爲上之應也。《京房易傳》には「陰が陽となり、下の者が上位につくと、死者が再生する妖が生じる」と言う。後、劉淵・石勒が反亂し晉を滅ぼしたのは、下の者が上位になることの應現である。）

『搜神記』は五行志に比べ人物の會話や不思議の内容が細かく記され、物語的に彩られた長文記事となっているが、さらに注目すべきは、『宋書』『晉書』には再生を劉淵・石勒の事件に結びつける歴史解

釋や『京房易傳』の引用が付されるのに對し、『搜神記』はそうした五行志的解釋がないことである。

他にも例えば『搜神記』卷七一「安豐女子」も『宋書』『晉書』五行志との共通記事であるが、『搜神記』は女が男に化す災異のみを載せるのに對し、五行志の方はやはり劉淵・石勒の事件と結びつけ、京房の「易傳」を引き解釋を付す。『京房易傳』を干寶が重視していたことは第一節でも觸れたが、『搜神記』には干寶が自らと同時代の五行志的災異記事について『京房易傳』や『京房易妖』を引き解釋する例も六例見える。ただし今取り上げた再生記事においては、『宋書』『晉書』に見える歴史解釋や京房の引用が『搜神記』ではなされていない。『搜神記』は五行志的な記事を集めつつも、豫兆としての災異ということもさることながら、再生という不思議の出來事自體に注目しこれを詳しく述べようという姿勢を強めているのである。

では次に、歴史の異聞を集めた『搜神記』の特質とその意義を『三國志』裴松之注が引用する『搜神記』の再生記事からも見ていく。

四、『三國志』裴松之注と『搜神記』の再生記事

『搜神記』卷十五「三六六」柳榮張悌³³は、柳榮という人物の再生を傳える。この記事は『三國志』吳書第三「孫皓傳」裴松之の注に『搜神記』が出典として引用される。『續漢書』劉昭注同様、宋の裴松之注は『搜神記』成立直後の『搜神記』引用として貴重であると同時に、『搜神記』の記事が歴史資料として取り上げられていることを示す点でも重要な意味を持つ。そしてさらに注目したいのは、この記事を引用する裴松之注の同一箇所には、同じ干寶の史書『晉紀』からも

『搜神記』所收の再生記事に關する考察

引用がなされていることである。

同様の例は『搜神記』卷八「二三五」熒惑星³⁴を裴松之注が引く場合にも見える。「熒惑星」は『宋書』『晉書』五行志との共通記事であるが、五行志の方は歴史解釋の部分で「干寶曰」とし、記事全體は『搜神記』に比べ簡略なものとなっている。一方『三國志』吳書「孫皓傳」裴松之注には「搜神記曰」として現二十卷本『搜神記』とほぼ同文の引用を見るが、裴松之注は同じ箇所には、やはり「干寶晉紀」から全く異なる記事を引用している。以上のことは、『搜神記』の記事が『宋書』『晉書』という史書五行志に歴史資料として利用されつつも歴史の異聞として独自の立場を確立しつつあったことを示す好例であり、かつ、裴松之注に並べられた『晉紀』と『搜神記』の存在は、干寶が一つの歴史事件や一人の歴史的人物にまつわる多様な角度からの記事を収集していたことを物語る。『搜神記』が歴史の異聞記事を獨自に多く集めていたことは、例えば、史書との共通記事が後世の類書等に史書からではなく『搜神記』を出典として引用される例がしばしば見えることや、また、類書や史書の注釋には『搜神記』を出典とする引用があるものの他書には類話が見られない記事が六四條に及ぶことから窺える。今取り上げた柳榮の記事も、干寶が『搜神記』に編集した再生記事が歴史の異聞として裴松之の目に留まり、それがそのまま取り入れられたのであろう。

五、『搜神記』編纂の意圖

—「神」を「搜」し究める「記」—

『搜神記』の記事は、五行志的世界と深く關わりとともに、その異同部分、すなわち『搜神記』における災異解釋の付加や省略、また獨

自の取材記事や説話的膨らみ等にその性格や特徴を浮かび上がらせる。そしてまた『搜神記』は、歴史の異聞を豊富に収める資料として、以後の史書や史書の注釋に多くの材料を提供した。では干寶自身が『搜神記』編纂に期した目的は何處にあったのか。

干寶は『晉書』卷八二の本傳によると、東晉の元帝のもと、王導により國史に推舉され佐著作郎等を歴任、編年體史書『晉紀』を著し「良史」とまで稱された人物である。また干寶は當代一流の史家であると同時に、漢易の大家、京房や夏侯勝に傾倒し自ら『周易』に注を付した易學の一專家であった。ということとは、五行志の記事を扱うことは、まさに干寶にふさわしい筈みであったと言いうる。

そして本傳にも引用されている『搜神記』序文では、干寶自らその編纂目的を次のように述べる。それは、歴史には異聞が付き物であり、そうした異聞をも含めて

以發明神道之不誣也。(神道の誣ならざることを明らかにする。) ということである。神道は『易』觀卦象傳に、

觀天之神道而四時不忒。聖人以神道設教。而天下服矣。(天の神道を觀ると四季の循環が違うことはない。聖人はこの神道をもつて教えを設け天下はそれに服す。)

とある。ここで言う「神道」とは四時順行の原理、つまりこの世に生じる自然・現象をかくあらしめている神妙な原理ということになる。そしてこれによれば、干寶が不思議の記事を集めたのは、それら歴史の異聞によってこの世の原理、すなわち「神」を「搜」し究めるためであったことになる。この世の原理を問い求め、それが現實に生かされることを願う態度は、史家干寶にとって當然あるべき姿勢である。『搜神記』は干寶が「易」と「春秋」の學問を基盤に編纂した、

東晉の學識の粹とも言うべき著作なのである。

ここで「神」という語に注目すると、例えば『搜神記』卷一―二六「吳猛」では、

遇至人丁義、授以神方。又得祕法神符、道術大行。(至人の丁義に會い神方を授かった。また神符の祕法を得て、その道術は大いに行われた。)

と、後に死者をも再生させる吳猛の術に關して神方・神符という語が見える。また卷十五―三六五「戴洋復生」は病死後再生して占候の異能を得た戴洋の記事であるが、その戴洋について『晉書』卷九五藝術「戴洋傳」は、

約知其有神術。…亮曰、「…君是神人也。」(祖約は戴洋に神術があることを知った。庾亮は「…君は神人だ」と言った。)

とし、神術を使う神人と言う。なお「吳猛」の記事は該當部分についても今見たのは『晉書』の文であり、神の語を干寶が用いる例ではない。しかし戴洋は干寶を東晉朝廷に推舉した華譚や陶侃等、干寶の周邊人物との交流もあり、また干寶自身も郭璞や韓友ら方術・占候の人士と交流しており『搜神記』には易筮や方術に長けた人物が多數登場する。例えば卷三―五三「管輅」は、玉基という人物の家で起こった怪を管輅が易卜によって占い解き明かすという記事であるが、その中に管輅の言葉として見える、

夫神明之正、非妖能害也。萬物之變、非道所止也。(そもそも神明の正は、妖が害すことはできないものである。萬物に生じる變は、道の止める所ではない。)

という部分の「神明之正」という語に注目したい。管輅は漢易を繼承

し方術に長けた人物であり、『搜神記』にはこの他にも、埋葬された亡者の祟りを管輅が筮によって明らかにする記事等がある。『搜神記』ではこのように、死の世界にも通じる方術を極めた人物に關わって「神明」の語が用いられるのである。

神明の語は『搜神記』では卷十三—三一九「澧泉」等にも干寶の用語として見えるが、『易』繫辭傳には次のような例が見える。

是以明於天之道。而察於民之故。是與神物、以前民用。聖人以此齊戒。以神明其德夫。(聖人は)天の道、人の世の事を明察し、神物(善)を作り未來の吉凶を知った。聖人は易を用いるにあたり齋戒し、その徳を神明にしたのであろう。「繫辭上傳」

古者、包犧氏之王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀鳥獸之文與地之宜。近取諸身。遠取諸物。於是始作八卦。以通神明之徳。以類萬物之情。(古、包犧氏が天下の王であった時、天に象を見、地に法を見、鳥獸の文様と地の宜を見、近くは身に取り、遠くは物に取り、始めて八卦を作った。こうして神明の徳に通じ、萬物の實情を類に示したのである。「繫辭下傳」)

また『易』説卦傳には、昔者、聖人之作易也。幽贊於神明而生蓍。(昔、聖人が易を作ったのは、神明を祕かに助けそれを伝えるために、蓍で卦を立てる方法を始めたのである。)

とあり、この部分には干寶の注も残されている。さらに神明という語は、方術・占候を極めた京房や夏侯勝等の本傳を収めた『漢書』卷七五の傳贊や『後漢書』方術列傳の序にも見え、そこには神明を究めるものは「易」と「春秋」だとある。これらの例において神明は、天地の變化や造化の根本原理に通じるという、「易」の本質に關わる言葉

『搜神記』所收の再生記事に關する考察

と讀める。その神明或いは神の語を用いて干寶が方術・占候そして死の世界に關わる異能を表現することは、また奇しくも『搜神記』の書名に通じる。再生や死の世界に關する記事は、まさに干寶が書名に掲げた「搜神」の意圖に沿うものとして『搜神記』に取り込まれたのだと考えられよう。

六、志怪小説『搜神記』へ

—『法苑珠林』を通してみる 五行志的記事の展開と變容—

では最後に、この『搜神記』がいかんにして志怪小説を代表する著作と捉えられていくのかということをも、『法苑珠林』に注目し考えてみる。『漢書』以下史書五行志と『搜神記』との類話のうち、人事に關する災異に共通記事が多いこと、そしてその共通記事の多くを『法苑珠林』が引用している傾向はすでに述べた。唐・道世の『法苑珠林』は、

表⑤ 『法苑珠林』97 送終篇引 『搜神記』

	搜 神 記	關連する五行志
1	◆6-143 兒啼腹中	漢志
2	◆6-146 人死復生	漢志
3	◆15-362 李娥	續志
4	◆6-166 桓氏復生	續志
5	◆15-363 史殉	
6	15-373 馮責人	
7	16-381 遼水浮棺	
8	2-45 營陵道人	
9	2-44 李少翁	
10	◆15-372 杜錫婢	宋志・晉志

現二十卷本『搜神記』四六四條のうち實に一二七條もの記事を引用するが、ここで押さえておくべきは、『法苑珠林』は佛敎世界を體系的に構築する類書であり、そこに引用される記事は佛敎例證話としての役割を與えられていることである。例えば『法苑珠林』卷三一妖怪篇は「干寶記云」として干寶の妖怪論を引き、「未達大聖之因果(大聖の因

果には達していない」としながらも決してこれを否定的に扱ってはいない。『法苑珠林』は『搜神記』の理論を認識した上で、そこに佛法を積み上げることで因果や變化の不思議を眞に解することができると考えていたようで、こうした觀點からすると、例えば『法苑珠林』卷三二變化篇に集中的に引用される人痴を中心とする『搜神記』の五行志の記事は、善惡の因果應報という佛教理論に通じるものと解釋しうる。

今回扱った『搜神記』の再生記事は、うち六條が『法苑珠林』卷九七送終篇にまとめて引用されている(表⑤)。『法苑珠林』送終篇は『搜神記』の記事に續いて『冥祥記』『高僧傳』『續高僧傳』『冥報拾遺』等から、寺を舞臺にし僧を主人公とする再生説話や不思議な死に關する説話を載せており、『搜神記』の記事が佛教説話へと連なるものとして扱われている。また第三節で取り上げた『搜神記』「河間郡男女」を引く『法苑珠林』卷七五には、同じく『搜神記』から「漢談生」「崔少府墓」等、亡者との墓中での幽婚を語る記事が合わせ並べられている。これは本來「五行志」的歴史的「再生」記事であった「河間郡男女」が、ここに至って、再生した亡者との結婚という説話的興味の側面が強調されて取り入れられたと考えられる。

『法苑珠林』所引の『搜神記』の記事は佛教例證話としての意味を付與されながら、因果應報につながる不思議な説話として出現したのである。本來「易」や五行災異思想に基づくものであった『搜神記』の記事は、しかしその内部にすでに史書五行志とは一線を畫す説話への萌芽が存在したことも、いま改めて確認したところである。言うならば『搜神記』の記事には、例えば『法苑珠林』が佛教例證話として『搜神記』の記事を活用しようとした際、それに應じうるだけの多面性や幅が備えられていたということである。

『搜神記』は、歴史資料として史書や史書の注釋に採られる一方、『法苑珠林』には佛教世界を説くための不思議を語る例として引かれる。そしてこうした後世における『搜神記』利用・活用の状況から『搜神記』を逆に照射してみるならば、『搜神記』は歴史の記録・異聞が一轉して、説話としての性格を強調され扱われていくという、中國文學史上重要な一轉換點に位置するものであることが浮かび上がってくる。かくして、この流れにおいて『搜神記』は中國志怪小説の開端、典型としての位置付けを與えられたのである。

おわりに

本稿では、『搜神記』所收の再生記事の考察を通じて、史書五行志の世界から説話的世界への展開・變容を見せつつ、やがて佛教類書にも活用されていく『搜神記』の姿を追った。もちろん再生記事以外の他の記事についても今後改めて詳細に検討していく必要があるだろうし、史書や五行志以外の前後の著作、例えば『風俗通義』や他のいわゆる志怪書との關係も視野に入れて論じていかねばならない。また唐初成立の『法苑珠林』がいかなる意圖を持って『搜神記』を多數引用したかについても、さらなる検討が必要である。

『搜神記』は『日本國見在書目錄』に著録されており、日本の説話世界の形成にも多大な影響を與えている。例えば日本最初の佛教説話集『日本靈異記』の冒頭説話に、『搜神記』所收の「霹靂被格」の記事に類似するモチーフが見えること等がそれを端的に示している。海彼をへだてた日本での享受をも含め、『搜神記』が歴史の記録から説話へと展開していく文學史上の畫期的著作であることの意義はすこぶる大きい。そうした價値を踏まえつつ『搜神記』の本質と變容を見極

めていくところ、『搜神記』ひいては中國志怪小説、さらには中國説話文學の形成と編纂を明らかにする上で、依然重要な視點となるものと考えられる。

注

- (1) 富永一登「魯迅輯『古小説鈎沈』校釋―『列異傳』―」『廣島大學文學部紀要』五四―二、一九九四年十二月參照。
- (2) 『列異傳』との共通記事のうち、後世の類書などに『搜神記』を出典とする引用のないものは卷十一―二五六、卷十六―三八〇の二條のみ。
- (3) 『搜神記』卷四―七四、卷五―九二等。
- (4) 『搜神記』序文に干寶が編纂目的を「以發明神道之不誣也」と述べることによる。これについては第五節にて再び述べる。
- (5) 小南一郎「干寶『搜神記』の編纂」『東方學報』六九、七十、一九九七年三月、一九九八年三月。李劍國「二十卷本『搜神記』考」『文獻』二〇〇〇年十月。同「干寶考」『文學遺產』二〇〇一年二月。
- (6) 西谷登七郎「五行志と廿卷本搜神記」『廣島大學文學部紀要』一、一九五一年四月。多賀浪砂「干寶『搜神記』の研究」近代文藝社、一九九四年五月。大村由紀子「『搜神記』第六・七卷成立過程小考」『中國研究集刊』閏號、二〇〇〇年六月。佐野誠子「五行志と干寶『搜神記』」『東京大學中國文學研究室紀要』四、二〇〇一年四月。同「五行志と志怪書―「異」をめぐる視點の相違―」『東方學』百四、二〇〇二年七月等參照。尚『四庫提要』以來の議論は大村論文に詳しい。
- (7) 小南一郎前掲論文、及び佐野誠子前掲論文「五行志と干寶『搜神記』」における小南氏のコメント・討論。
- (8) 竹田晃「六朝志怪に見える再生譚」『人文科學科紀要國文學・漢文學』六十、一九七五年三月。
- (9) 大橋由治「再生説話から見た『搜神記』の特徴に就いて」『大東文化

『搜神記』所收の再生記事に關する考察

- 大學漢學會誌』三四、一九九五年三月。
- (10) 拙論『搜神記』の語る歴史―史書五行志との關係―」『二松』十六、二〇〇二年三月參照。『搜神記』を引用する書目、類話は汪紹楹校注『搜神記』（中華書局、一九七九年九月）を參照。
- (11) 佐野誠子前掲論文「五行志と干寶『搜神記』」にも指摘がある。
- (12) 話番號及び題は汪紹楹前掲校注本參照。
- (13) 引用は『法苑珠林』による。これは現二十卷本『搜神記』よりも『法苑珠林』が引く『搜神記』の方が原本に近い本文を残していると考えられるからである。
- (14) 『漢書』卷二七・五行志之上「下人伐上之綱」。吉川忠夫他譯注『漢書五行志』平凡社、一九八六年九月參照。
- (15) 卷六一―三八、一四五。
- (16) 卷六一―三〇、一三四、一四一、一四四。
- (17) 『搜神記』卷六一―三〇と共通記事。
- (18) 卷六一―二二、一一二、一一三、一三〇、一四一。
- (19) 『搜神記』が『漢書』五行志との共通記事において、劉向等他の災異思想家の解釋を省略するのに對し京房の解釋はそのまま残す例として、卷六一―一一、一一六、一一八、一三四等がある。前掲拙論參照。
- (20) 『搜神記』卷十五―三六二と共通記事。
- (21) 『晉紀』總論「雖以中庸之才、守文之主治之、辛有必見之於祭祀……（たとえ中正の徳をそなえた天子や先君の法度を遵守する君主がこれを治めたとしても、辛有は必ずや祭祀の中に滅亡の兆しを見出したであろう。）」『文選』卷四九。
- (22) 「李娥」は『法苑珠林』卷九七にも引用されるが、簡略化されている。
- (23) 「德陽殿蛇」は『續漢志』第十七・五行五「龍蛇孽」注、「荊州童謠」は同第十三・五行一「謠」注に引用される。
- (24) 『續漢書』郡國志引「干寶搜神記」のうち四條は現『搜神記』にない

逸文である。また禮儀志・祭祀志・百官志・輿服志各注は十八箇所に干寶の文章を引く。

- (25) 『宋書』卷三四志・五行五「人痾」、『晉書』卷二九志・五行下「人痾」。
- (26) 前掲拙論参照。
- (27) 西谷登七郎、佐野誠子前掲論文「五行志と干寶『搜神記』」等。
- (28) 『宋書』卷三三志・五行四「魚孽」 晉武帝太康中條。
- (29) 西谷登七郎前掲論文にも言及がある。
- (30) 『搜神記』卷十五—三六〇の共通記事。
- (31) 『法苑珠林』卷三二に引用がある。なお『搜神記』卷十五—三七「棺中生婦」も『搜神記』が再生のみを述べるのに對し、『宋書』『晉書』は『京房易傳』を引き解釋するが、これは他書に『搜神記』の引用が見えず原「搜神記」に存在した記事であるか判断が難しい。
- (32) 卷七一—八六、二〇四、二〇八、二二七、二二二、二二六。
- (33) 「志怪小説」と『三國志』裴松之注の關係については林田愼之助「六朝の史家と志怪小説—裴松之の『三國志』注引の異聞説話をめぐって—」(『立命館文學』五六三、二〇〇〇年二月) 参照。
- (34) 前掲拙論参照。
- (35) 仲畑信「干寶易注の特徴」(『中國思想史研究』十一、一九八八年十二月) は、干寶の易學が漢易の中でも京房に基づくもので、かつ史家としての意識が反映していると指摘している。干寶と京房については盧央『京房評傳』南京大學出版社、一九九八年十二月も参照。
- (36) 小南一郎前掲論文に言及がある。なお小南氏は『搜神記』の名を鬼神世界の探究者干寶にふさわしいものと指摘する。
- (37) 『易』の解釋は本田濟『易』(朝日新聞社、一九六六年二月) を参照。
- (38) 『晉書』卷五二「華譚傳」。なお干寶周邊の人物關係については小南一郎前掲論文に詳しい。
- (39) 『晉書』卷七二「郭璞傳」、同卷九五「韓友傳」参照。
- (40) 大橋由治前掲論文も儒道雙修の理論に關わる「神明之本」という語を『搜神記』序文の「神道」との關連で取り上げている。本稿はさらに『易』の用語に注目したい。
- (41) 鈴木由次郎『漢易研究』明德出版社、一九六三年三月等参照。
- (42) 『搜神記』卷三一五五、五六。『三國志』魏書第二九方技「管輅傳」の類語。
- (43) なお『三國志』魏書「管輅傳」の共通記事には神明の語は見えない。ただ『搜神記』における神明の語は管輅の發言の中のもので、干寶が議論解釋に用いた語とは言えない。しかし『太平廣記』卷三五九引『搜神記』「王基」には神明の語が見えることから、神明は干寶が編集した記事に存在した語と考えられる。
- (44) 『法苑珠林』卷六三に引用がある。
- (45) 李鼎祚『周易集解』引干寶「易注」。
- (46) 『漢書』卷七五傳贊「贊曰、幽贊神明、通合天人之道者、莫著乎易、春秋。」
- (47) 『搜神記』卷六一—一〇二との共通記事。
- (48) 『法苑珠林』變化篇は『搜神記』を二二條引用するが、うち『漢書』五行志とは四條、『續漢書』五行志とは二條、『宋書』『晉書』五行志とは六條の共通記事がある。なお『法苑珠林』の特定の篇に集中的に引用される『搜神記』には小南一郎前掲論文も注目し取り上げているが、史書五行志との共通記事を何故『法苑珠林』は史書からでなく『搜神記』を出典として繰り返し引用するかについては、『法苑珠林』の引用態度の解明と共に今後さらなる追究が必要である。
- (49) 『搜神記』卷十六—三九六、三九七。
- (50) 『搜神記』卷十一—三〇五。
- (付記) 本稿は日本中國學會第五十三回大會(二〇〇一年十月、福岡大學)での研究發表に基づき補筆訂正を加えたものである。